

【予稿集】

日本の公立図書館における BL 図書の収集提供に対する人びとの意識

アンケート調査の中間分析

片山ふみ*, 河内ひより*, 唐津日陽*, 秋葉桃子*,
木間礼子*, 高嶋かなえ*, 高山みのり*, 山中友紀子*

*聖徳大学文学部

*katayama@wa.seitoku.ac.jp

本研究の目的は、公立図書館における BL 図書収集提供に対しての人びとの意識を明らかにすることである。10代から70代の性別の異なる400名に対するwebアンケート調査の結果、公立図書館でのBL図書収集提供にポジティブな回答をしたのは84%、ネガティブな回答は16%であった。こうした賛成、反対の意識にはBL図書に対する認識、公立図書館の役割に対する意識、現実の男性同士の恋愛に対する意識などの項目が影響を与えていた。

The People's Awareness of the Collection and Provision of BL Books in the Public Libraries in Japan The Interim Analysis of the Survey

Fumi KATAYAMA*, Hiyori KAWAUCHI*, Hinata KARATSU*, Momoko AKIHA*
Reiko KIMA*, Kanae TAKASHIMA*, Minori TAKAYAMA*, Yukiko YAMANAKA*

*Faculty of Literature, Seitoku University

1. はじめに

本研究では、BL 図書提供に対して人びとがどのように考えているのか、賛成派、反対派の意識に影響を与える要因は何なのかを明らかにすることを目的とする。

2008年、堺市立図書館で収集提供されているBL(ボーイズラブ)図書に対し、匿名の一市民とその市民に賛同する市議らから廃棄要求があり、約5500冊のBL 図書が開架から除去される出来事がおきた。

昨今LGBTQの推進や社会的関心の高まりから、事件当時とは異なりBL 図書が図書館資源として許容されるような認知の変化が進む一方で、2010年以降、BL 漫画は多くの自治体で「有害図書」、「不健全図書」として指定され、図書館での収集・提供に強い懸念も生じている。こうした状況は図書館とBL 図書に関する継続した議論の必要性を

示している。

公立図書館におけるBL 図書の収集提供について人びとの意識に着目して分析した研究は存在する[1]が、いずれも調査対象の年代が比較的若い層に限られていること、また図書館の自由の観点に基づき、BL 図書の提供が前提となる議論となっていることを指摘できる。本研究では、幅広い年代に対し調査を実施することで、公立図書館の利用者層の意見をカバーすることを目指す。また、図書館がBL 図書を提供すべきである、もしくは、提供すべきでないなどという議論は行わず、あくまでもアンケート調査からわかる客観的事実の把握に努めるものとする。

2. 研究方法

本研究の目的に従い、広く、一般の意見を募るため、Microsoft Forms を利用したweb アンケー

ト調査を実施する。

2.1 仮説

従属変数を「公立図書館での BL 図書提供に対する意識」と設定し、独立変数を以下の4点に大別した。

- ① 公立図書館の目的・役割に対する意識
- ② BL コンテンツへの意識
- ③ 性的マイノリティに対する意識
- ④ 先行研究が指摘している属性

公立図書館の資料提供にあたっては、まず公立図書館の在り方に対する意識が影響すると考えられるため、①公立図書館の目的・役割に対する意識の要因を設定した。これは図書館における勤務経験や図書館情報学課程、司書資格課程履修などで専門的に図書館について学んだかどうかによって影響をうけうると考えられるため、図書館勤務経験、図書館情報学課程・司書資格課程履修という要因を媒介変数として設定した。また、堺市の事例で、「(BL 図書は) 子どもに悪影響」という指摘があったことを踏まえ、子の有無によっても意識に違いが生じる可能性があると考え、子の有無という要因も加えた。

また BL 図書に対する認知や好みが影響を及ぼす可能性を踏まえ、②BL コンテンツへの意識を加えた。そして、BL コンテンツへの意識には、回答者の BL コンテンツへの視聴経験や、視聴期間や、視聴するにあたって必要となる対価（経済状況）も影響を与える可能性があると考え、それらを媒介変数として扱うこととした。

さらに、海外では BL コンテンツをめぐる現象が現実の同性愛に対する寛容と関係があると指摘されている[2]。よって性的マイノリティに対する意識と公立図書館における BL 図書の収集提供に対する意識との影響を探るべく③を独立変数として組み込んだ。

また、性的マイノリティへの意識に影響を与えているとされる性別、年代、居住地、学歴、存在認識[3]が、公立図書館における BL 図書の収集提

供に対する意識にも影響を与えているのかを把握するため④を加えた。なお、ここでいう存在認識とは、性的マイノリティの存在を現実で認識しているか否か、つまり身近にいるか否かを指す。

先述した先行研究では②の部分との関係には意識が向いているが、①③④については検討されていない。特に、人びとが BL 図書をジェンダー関連図書と捉える場合は、③④の視点が重要となる。

2.2 質問項目

仮説を踏まえて、質問項目を設定した。次の QR コードより、質問項目を確認することができる。

回答により分岐が生じるため、質問項目確認の際はその点にご留意いただきたい。また、公立図書館の目的や役割について問う質問の選択肢は、文章が長く、選択肢も多いため、ランダムで表示されるようにし、並び順による回答への影響を減らすように設定した。なお、このアンケートは質問項目の公開用に作成したフォームであり、誤って回答してしまったとしても集計の対象にはならない。



3. 調査結果

調査期間は、2024年6月26日（水）から2024年7月5日（金）とした。機縁法によって最初の標本を募り、そこから、雪だるま式サンプリングを用いて、回答者を募った。回答数は400件で、すべてを有効回答とした。なお、本稿は中間報告として、単純集計およびクロス集計から得られた主要な結果について考察を行う。重回帰分析を経た最終分析結果は第26回図書館総合展2024のポスターセッションにて発表する。

3.1 公立図書館の役割に対する意識と公立図書館での BL 図書の収集提供についての意識

「あなたは公立図書館（自治体が設置する図書館）が BL 本（ボーイズラブを題材とした小説、漫画、コミック）を収集提供することについてどのように感じますか」という質問に対する回答としては、「いいと思う」「どちらかといえばいいと思う」という賛成派が全体の 84%を占めた。

賛成派の理由を多い順に 3 つ挙げると、「LGBTQ の理解、多文化共生意識の醸成など、社会に良い影響を与えると思うから」（23%）、「人々が読みたいもの、人気のあるものを提供するのが図書館の役割だと思うから」（19%）、「資料提供にあたって中立性が大切であると思うから」（19%）という結果となった。残り 16%の反対派の理由としては、「公立の施設が提供する読書材として不適切だと思うから」（35%）、「BL コンテンツに対して個人的にネガティブな感情をもっているから」（12%）、「税金の用途として不適切だと思うから」（11%）が挙げられた。

以上より、BL 図書を公立図書館で収集提供することの是非の意識には、賛成派、反対派それぞれの図書館の役割に対する意識の違いがみられる。賛成派にみられる、公立の施設としての中立性の意識は異性愛と同性愛の中立性という意味であると考えられる。また、賛成派の「人々が読みたいもの、人気のあるものを提供するのが図書館の役割だと思うから」からは資料選択論でいうところの要求論的立場、反対派の「公立の施設が提供する読書材として不適切だと思うから」や「税金の用途として不適切だと思うから」という意見からは、価値論的立場をとる層が多いことがわかる。

さらに、BL 図書に対する認識の違いも潜在していそうである。賛成派の「LGBTQ の理解、多文化共生意識の醸成など、社会に良い影響を与えると思うから」には、BL 図書を性と生殖に関する健康・権利（SRHR）関連図書として位置づける認識が見られるが、反対派の意識からは、「有害図書」、「不健全図書」としての認識がにじんでいる。

なお、図書館勤務経験や図書館についての専門的学習経験がある人（n=82）とない人（n=318）では、公立図書館での BL 図書の収集提供の意識

に大きな差はみられず、いずれにも賛成派、反対派が似た比率で存在しており、図書館の自由についての理解が BL 図書の扱いに対する意識に大きな影響を与えているわけではないことがわかった。

3.2 BL コンテンツへの意識と公立図書館での BL 図書の収集提供

BL コンテンツに対する意識（好悪）と公立図書館の BL 図書の収集提供についてのクロス集計の結果では、BL コンテンツが非常に好きな層であっても公立図書館での収集提供には躊躇する人も半数以上いることや、どちらかといえば嫌いな層に「良くないと思う」回答者はおらず、BL コンテンツに対する好悪は図書館での収集提供に対する意識と必ずしも相関しないことがわかる。

一方で、回答者が 1 名ではあるものの、BL コンテンツが非常に嫌いであると回答した回答者は公立図書館での収集提供を良くないと判断している。また、この結果は 3.1 で見た反対派の理由である「BL コンテンツに対して個人的にネガティブな感情をもっているから」と親和性がある。このことから反対派の一部では BL コンテンツへの好悪の意識が公立図書館での BL 図書収集提供への意識と関係が強まる可能性を指摘できる。

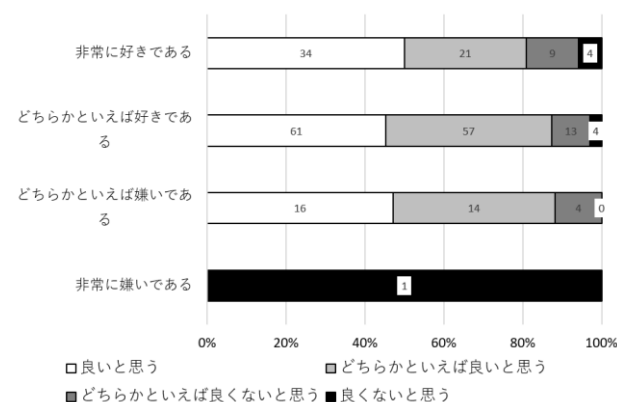


図 1：BL コンテンツに対する好悪×図書館での収集提供

3.3 性的マイノリティに対する意識と公立図書館での BL 図書の収集提供

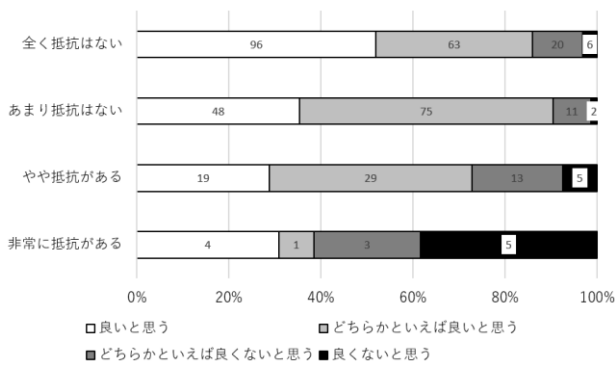


図2：現実の男性同士の恋愛に対する意識×図書館での収集提供

現実の男性同士の恋愛に対して抵抗がない人ほど公立図書館でのBL図書収集提供に寛容な傾向がみられる。一方で、現実の男性同士の恋愛に対する意識に抵抗がなくても公立図書館でのBL図書提供にはネガティブな層や、現実の男性同士の恋愛に対する意識に抵抗はあるが、公立図書館でのBL図書収集提供にはポジティブな層も一定数存在しているため、慎重な考察が必要である。

4. おわりに

本稿では、公立図書館におけるBL図書提供に対しての人びとの意識やその意識に影響を与える要因を明らかにする目的で行った調査研究の中間報告を行った。公立図書館でのBL図書収集提供に賛成したり、反対したりする意識には、BL図書に対する認識や公立図書館の役割に対する意識、現実の男性同士の恋愛に対する意識などの項目が影響を与えていた。これらの影響要因について指摘した先行研究はなく、本研究の新規性といえる。

また堺市で起きたBL排除事件に関わる文献をレビューした片山ら[4]は、図書館業界と図書館業界以外では、論点に違いがあることを指摘しているが、本稿では、図書館業界内でも意見の相違がある可能性が示唆された。BL図書の公立図書館での提供をめぐるのは、「図書館の自由」を学んだ、あるいは勤務経験として理解している場合であっても抵抗をもつ層が一定数存在し、議論の余地の残る資料だといえる。

注・文献

- [1]たとえば金丸早希, 角田裕之. 「BL」資料の図書館での扱い：小説における「腐女子」が好む属性の傾向の調査を通して. 日本図書館情報学会研究大会発表論文集. 2013, (61), p.77-80./藤嶋紫姫, 新藤透. 公共図書館に於ける所謂「BL小説」の所蔵について. 図書館総合研究. 2015, (15), p.57-65.
- [2] BLが開く扉: 変容するアジアのセクシュアリティとジェンダー. 青土社, 2019. によると, タイ社会ではBL人気は「現実上の同性愛に対する寛容性の向上に貢献している」(p. 208). また, アジアで初めて同性婚が正式に認められた台湾では, その成立を求める運動にBLファンが積極的に協力したことが報告されている (p. p. 217-239). トーマス・ボーディネットは, 日本のBL消費者である中国人ゲイ7名を分析し「BLは同性愛は危険, 非正当, 変態であるとする言説とたたかうための潜在的な力をもっている」(p. 188)と指摘している.
- [3]次に挙げる文献でこの点が指摘されている. 釜野さおり. 同性愛・両性愛についての意識と家族・ジェンダーについての意識の規定要因: 性的マイノリティについての意識: 2015年全国調査から. 家族社会学. 2017, 29(2), p.200-215./釜野さおりほか. “性的マイノリティについての意識: 2015年全国調査報告著”. 広島修道大学. <https://alpha.shudo-u.ac.jp/~kawaguch/chousa2015.pdf>, (参照2024-10-11)./中澤. 同性愛に対する意識: JGSSを用いた規定要因分析と要因分解. 研究論文集. 2021, 19, p.115-126.
- [4] 片山ふみ, 坂本俊. 堺市立図書館におけるBL(ボーイズラブ)図書の規制を取り巻く論点の整理. 研究紀要. 2025, no.35, ページ未定. (掲載決定)